

科目4

子どもの発達理解

科目4：子どもの発達理解

ねらい

- 子どもの発達を理解するための基礎を学んでいる。
- 育成支援における子どもの発達の特徴や発達過程を理解している。
- 子どもの発達理解のための継続的な学習の必要性を理解している。

主な学習内容

- 子どもの発達理解の基礎
- 子どもの遊びや生活と発達
- 子どもの発達理解と育成支援
- 継続的な学習の必要性

1. 子どもの発達理解の基礎
2. 子どもの遊びや生活と発達
3. 子どもの発達理解と育成支援

1. 子どもの発達理解の基礎

1. 子どもの発達理解の基礎

「発達」の概念

○放課後児童クラブ運営指針 第2章

放課後児童クラブでは、放課後等に子どもの発達段階に応じた主体的な遊びや生活が可能となるようにすることが求められる。このため、放課後児童支援員等は、子どもの発達の特徴や発達過程を理解し、発達の個人差を踏まえて一人ひとりの心身の状態を把握しながら育成支援を行うことが必要である。

○子どもと関わる時に、どこをみるか。

体のようす、人との関係、置かれている環境

○子どもの行動の変化を理解する。

⇒発達の理解が、多様な育成支援の手がかりにつながる。

1. 子どもの発達理解の基礎

「発達」の時期区分と特徴

★発達の時期区分



それぞれの時期は次の時期の単なる準備段階ではなく、子どもにとって固有の意味と価値を持っている。

子どもの発達過程では、運動や感情、言語や思考、人格や社会性などの機能領域ごとに変化が見られ、個人差が大きいですが、発達全体では大きなまとまりがあるため、それをもとに時期区分している。

1. 子どもの発達理解の基礎

「発達」の時期区分と特徴

乳児期

- ◆ 完全に親や大人に依存している時期
- ◆ 乳児期前期は仰臥位（あおむけ）や伏臥位（うつぶせ）での生活
「おはしゃぎ」などを通じて親と心理的な交流を図る
- ◆ 乳児期後半は、座位での生活と四つ這い移動を特徴
対面遊びを通じて周囲の人と交流
喜怒哀楽など情動による関わりが展開します。

1. 子どもの発達理解の基礎

「発達」の時期区分と特徴

幼児期

- ◆ 心理的な離乳をし、友達関係を成立させて、次第に親から自立し始める時期
- ◆ 幼児期前半には二足歩行が確立し、道具の使い方が巧みになり、言語によるコミュニケーションが進みます。
- ◆ 2歳半から3歳にかけて反抗期を迎え、子どもは親と対立しながら自我を確立していきます。
- ◆ 幼児期後半には子どもは親から見てもらふことと親から隠れてすることを使い分ける
- ◆ 子ども同士の遊びが盛んになり、ごっこ遊びなどの虚構的世界を共有しながら子ども達の間でのコミュニケーションが活発になる

1. 子どもの発達理解の基礎

「発達」の時期区分と特徴

児童期

- ◆ ものや人の世界に対する興味が広がり、その興味の持続・探求のために自らを律することができるようになる。
- ◆ 興味や規律は、学校における学習を可能にし、学校教育で更に培われる。
- ◆ 児童期前半には書き言葉や数量概念に進歩が見られ、学習を通じて様々な知識を増やしていく。また、他の子どもや大人の多様な人格について経験する。
- ◆ 児童期後半（9、10歳頃を境に迎える）では特定の事物や場面に捉われるのではなく、より一般的で本質的なものを捉えようとする概念的な思考の初歩が形成される。
- ◆ 更には、子ども集団の中で過ごすことにより、規律と個性が培われていく。

1. 子どもの発達理解の基礎

「発達」の時期区分と特徴

思春期・
青年期

- ◆ 性的な成熟をきっかけにした第二の自我の誕生の時期
- ◆ 青年期前半は思春期と呼ばれ、子どもは自分の身体の突然の変化に戸惑い、自分のことを気にするようになる。また、部分的ではあるが、論理的な思考が研ぎすまされ、人生や社会について考えるようになる。
- ◆ 青年期後半には、友情や恋愛を経験し、自分の個性や能力を自覚し、世界観を獲得し、職業についての選択や準備をする。

参考資料

・厚生労働省編(2021)『改訂版 放課後児童クラブ
運営指針解説書』フレーベル館. p34-55



令和3年度「放課後児童支援員認定資格研修及び子育て支援員研修の受講促進のための映像教材の作成・周知一式」事業で制作しました。

科目4

子どもの発達理解

もくじ

1. 子どもの発達理解の基礎
2. 子どもの遊びや生活と発達
3. 子どもの発達理解と育成支援

2. 子どもの遊びや生活と発達

2. 子どもの遊びや生活と発達

密接に結びつく「遊びと生活」

- ◆ 遊びは子どもにとって最も自主的な活動である。
- ◆ 脳神経系の成熟に伴って、新しい機能が生まれれば、それ自身が繰り返される。
例：ものをつかむことと放すこと、見ることと見ないこと、歩くことと止まることなどの行為
- ◆ そこに大人が関わると「いないいないばあ」などの遊びにつながる。やがて子どもは砂遊びや積み木遊び、こままわしやあやとり、かくれんぼや鬼ごっこなど、さまざまな遊びに没頭するようになります。
- ◆ 子どもにとって遊びは総合的活動である。
- ◆ 子どもは遊びのなかでさまざまなことを学習し、遊びを通して運動能力や社会性、創造性などを発達させていく。

2. 子どもの遊びや生活と発達

密接に結びつく「遊びと生活」

- ◆ 遊びは伝承され、地域の文化として定着してきた。
- ◆ 遊びの主人公は子どもたちです。

○ おにごっこを例に考えてみましょう

- ・ 日常の自己から遊びの自己への変身
- ・ 身のこなしや運動能力
- ・ ルールの認識
- ・ 人格的発達



2. 子どもの遊びや生活と発達

密接に結びつく「遊びと生活」

- ◆ 生活は、それぞれに性質の異なる2つの相から構成される。
例：睡眠と覚醒、食事と排泄、活動と休息 など
- ◆ この2つの相の交替は、社会の事情によってもたらされる。
例：就寝時間や食事時間などは、保護者の生活時間によって制約される
- ◆ 児童期は、自覚性や計画性が発達する時期
⇒ 自分で計画的に生活することに向かう。
子どもに指示するのではなく、どうしたいのか、どうしたかったのかよく聞くことが必要。

2. 子どもの遊びや生活と発達

遊びと子どもの社会性の発達

- ◆ 遊びや生活を通して、社会性を発達させていく。
- ◆ 遊びの形態はさまざま（例：一人遊び、見ているだけ 等）であるが、尊重されなければならない。
- ◆ 遊びのなかで、他児の能力を知り、自分や他児の特長をいかす等の工夫をする。
楽しむために、仲間のすべてを必要とする。
⇒ 社会性の獲得
- ◆ 成功や失敗、達成や挫折、自信や落胆などの両極端の感情に戸惑うこともある。
- ◆ 認識や感情、人格等のさまざまな能力が総合化される。

参考資料

・厚生労働省編(2021)『改訂版 放課後児童クラブ
運営指針解説書』フレーベル館. p34-55



令和3年度「放課後児童支援員認定資格研修及び子育て支援員研修の受講促進のための映像教材の作成・周知一式」事業で制作しました。

科目4

子どもの発達理解

もくじ

1. 子どもの発達理解の基礎
2. 子どもの遊びや生活と発達
3. 子どもの発達理解と育成支援

3. 子どもの発達理解と育成支援

3. 子どもの発達理解と育成支援

発達段階を踏まえた育成支援の重要性

○放課後児童クラブ運営指針 第1章3(1)

放課後児童クラブにおける育成支援は、子どもが安心して過ごせる生活の場としてふさわしい環境を整え、安全面に配慮しながら子どもが自ら危険を回避できるようにしていくとともに、子どもの発達段階に応じた主体的な遊びや生活が可能となるように、自主性、社会性及び創造性の向上、基本的な生活習慣の確立等により、子どもの健全な育成を図ることを目的とする。

【実際の場面】

- ・いろいろな子どもがいて、心身の状態もさまざま
- ・子どもの表現は複雑 ⇒ 一人ひとりをあたたかく迎え入れる

3. 子どもの発達理解と育成支援

発達過程における放課後児童支援員の存在の意味

○放課後児童クラブ運営指針 第3章1(4)⑤

子どもが発達段階に応じた主体的な遊びや生活ができるようにする。

【遊びの支援場面】

- ・一緒に遊ぶ 豊富な興味関心への対応
- ・遊び仲間の調整 加減がわからない子どもへの支援
- ・遊びへの助言 新たな遊びへの誘い
- ・遊びの環境調整 子どもの発達に応じた柔軟な支援

参考資料

・厚生労働省編(2021)『改訂版 放課後児童クラブ
運営指針解説書』フレーベル館. p34-55



令和3年度「放課後児童支援員認定資格研修及び子育て支援員研修の受講促進のための映像教材の作成・周知一式」事業で制作しました。